

戯曲

# Global Baby Factory

グローバル・ベイビー・ファクトリー

2012年5月10日版

団体名 劇団印象-indian elephant-

作家名 鈴木 アツト

上演時間 約100分

登場人物

- 河野砂子
- 河野礁子（砂子の妹）
- 砂子の母親
- 砂子の父親
- 芦田潤一
- 岩 那智
- 柳生（カメラマン）
- 権藤宣子（コーディネーター）
- ナジマ・シャヴァン
- ルビナ・アールン
- ポワル
- スーマン・グプタ（台詞なし）
- プーナン・シャー（台詞なし）
- マルパニ
- アヌープ
- クジャク
- スキヤキ
- オニギリ
- ミソスープ
- チクワハンペン
- 実況の男
- エステティシャン
- 20代前半の河野砂子A
- 20代後半の河野砂子B
- マザードリームの助手A（台詞なし）
- マザードリームの助手B（台詞なし）
- 産婦人科医
- 親戚のおじさん・おばさん合唱団
- モンサントのセールスマンたち
- 砂子の会社の同僚たち
- インド人助手

第1場 夢の中のスイミングプール

俳優たちがぞろぞろと出てくる。それぞれ白い衣装を身にまとい、思い思いに手首を捻ったり、足首を回したり、ストレッチ。衣装のお尻には細長い尻尾のようなもの。その尻尾を手でグルグル回したりする者もいる。突然、ピーっというホイッスルの音。実況の男、登場。

実況「第一のコース！スキヤキ。スキヤキ」

黄色い歓声。スキヤキと呼ばれた俳優は、手を挙げて応える。

実況「第二のコース！オニギリ。オニギリ」

歓声。オニギリと呼ばれた俳優は、手を挙げて応える。

実況「第三のコース！ミソスープ。ミソスープ」

歓声。ミソスープと呼ばれた俳優は、手を挙げて応える。

実況「第四のコース！チクワハンペン。チクワハンペン」

歓声。チクワハンペンと呼ばれた俳優は、手を挙げて応える。

実況「位置について、」

スキヤキたち、水泳のスタートの格好をする。

実況「(喘ぐ) オオオ、、オオオ、、オオッ！」

実況の男、突然、射精の瞬間の表情と声。オオッ！という最後の瞬間に合わせて、スキヤキたちがプールに飛び込むように前方に飛び出し泳ぎ始める。

それは受精を賭けた水泳レース。

精子たちが数多の障害を乗り越えていくと、その先に卵子（クジャク）が見えてくる。スキヤキが一番先に卵子（クジャク）に飛び込むと、インド人の妊婦が二人、現れる。精子たちと卵子、実況の男、退場。

第2場 あるインドの病院

ナジマ「私、ついに頭がおかしくなっちゃったかも」

ルビナ「え？なんで？」  
ナジマ「だって毎晩同じ夢見るし。しかも変な夢。精子の夢」  
ルビナ「精子の夢？」  
ナジマ「変な名前のついた精子の夢」  
ルビナ「変な名前？」  
ナジマ「たしかスキヤキ？そう、スキヤキって名前だった」  
ルビナ「スキヤキ？」  
ナジマ「知ってるの？」  
ルビナ「それ、日本の食べ物だよ！」  
ナジマ「日本の？」  
ルビナ「そう、日本の。マジッけるんですけど」  
ナジマ「なんで笑うのよ？」  
ルビナ「だってひどい料理なのよ。牛食べる料理なんだから」  
ナジマ「牛？」  
ルビナ「牛を鍋するんだから」  
ナジマ「牛を鍋？ひどいね」  
ルビナ「そういえば、」  
ナジマ「何よ」  
ルビナ「あんたのは日本人だったね」  
ナジマ「、、」  
ルビナ「だからじゃない？その夢」

ナジマとルビナ、退場。

### 第3場 日本・スポーツジム

グワシヤンギギギ、グワシヤンギギギと、工業社会のイメージで、スポーツジムのマシーンの動きがアンサンブルたちの身体表現で表される。砂子と那智がジムのスポーツ器具でエクササイズしている。那智は、少しお腹が出ている。

那智「見ないだよ」  
砂子「別に見てないよ」  
那智「嘘よ。見たでしょ？お腹」  
砂子「見てないから」  
那智「くそ。妊婦じゃないのに妊婦みたいに」  
砂子「気になるなら痩せれば？」  
那智「これでも痩せようとしてるの」  
砂子「へえ、そう」  
那智「いいよね、砂子は大学時代から変わらないから。とても今年で37には見えない」  
砂子「そんなことないよ」

那智「実際どれくらいお金かけてるわけ？」

砂子「何が？」

那智「そのスタイルとかお肌を保つために」

砂子「かけてないわよ」

那智「またまた」

砂子「かけてないわよ」

那智「嘘だ。絶対嘘だ」

砂子「本当よ」

那智「(砂子の頬をさわる) だってこんなにプリンプリンしてる」

砂子「何もしないのがいいのよ」

那智「はい？」

砂子「顔はさっと洗ってさっさと眠る。それが一番」

那智「それだけで？」

砂子「そう。それだけ」

那智「くそ。羨ましいー！」

砂子「(観客に) そんな」とはもちろん嘘で」

エステティシヤンの声「勝てませんわ、河野さんには」

#### 第4場 日本・エステティックサロン

エステティシヤン、登場。那智、退場。砂子、エステティックサロンでマッサージを受けている格好になる。

砂子「そう？」

エステティシヤン「おいくつでしたっけ？」

砂子「知ってて聞いてない？今年で37です」

エステティシヤン「嘘だ。全然見えませんよ」

砂子「いやいや、いろいろ衰えてるから」

エステティシヤン「お仕事も順調なんでしょ？お住まい恵比寿でしたっけ？もう何でも持っていらっしゃる」

砂子「そんなことないの」

エステティシヤン「河野さんみたいな常連さんを持って、私、本当に幸せ。ここだけの話、エステのし甲斐のない方もいらっしやいますから。絶対言えませんよ。言えませんが、焼け石に水な方？むしろ豚に真珠？あ、言っちゃった。それに比べ河野さんは私が頑張れば頑張るほどどんどん美しくなる。こんな喜びはありません」

砂子「ありがとうございます」

エステティシヤン「ところでこのかたつむりのエキスを使った新しいクリーム試してみませんか？またまた若返りますよ」

砂子「アンチエイジングの魔法は高くつく。でも私は若さを買つことができる。この世には金で買えないものはないのだ」

礁子の声「ぼんじりも食べていい？」

第5場 焼き鳥屋

礁子、登場。エステティシャン、退場。

砂子「どっぞ」

礁子「いただきます、（食べながら）「っやって串をはずさないで焼き鳥食べるのいつ以来だろ？」

砂子「ちよつと大袈裟じゃない？」

礁子「これが大袈裟じゃないんだなあ」

砂子「こんなんで喜んでくれるならいつでも奢るわよ」

礁子「いいなあ、お姉ちゃんは」

砂子「え？」

礁子「そんなに収入があつて。自由に生きられて」

砂子「だって働いているもの。自分の時間を売って」

礁子「お姉ちゃんは時給にしたら5千円ぐらいい？」

砂子「もつとかな？」

礁子「売り甲斐あるよね？私なんて時給930円なのに」

砂子「930円？何フィリピン人？四捨五入しても千円いかない」

礁子「舞台のために休める仕事ってなるとそういう風になっちゃうのよ」

砂子「何よ、あんたこそ自由に生きてるじゃない。いい大人が趣味のために一週間も二週間も働かないん

だから」

礁子「舞台は趣味じゃないです。私の本業です」

砂子「食えてないんだからただの趣味よ。いい？私、稼いでますけどね、あんたと違って自分の自由だけ考

えてるわけじゃないの。月に一回、恵まれないアフリカの子供たちに募金してるんだから」

礁子「お、素晴らしい偽善」

砂子「悔しかったらやってみなさいよ。素晴らしい偽善」

礁子「、、ねえ、お姉ちゃん」

砂子「何？」

礁子「一生のお願い」

砂子「だから何よ？」

礁子「、、私にも募金して」

砂子「は？」

礁子「お金貸して」

砂子「、、」

礁子「私も思うのよ。自由ってお金で買うもんだよなああって。自分のも、他人のも、、投資してくれない？

私に。この借りはいつかきつと返すから。お願い」

砂子「舞台やって借金でも作ったの？」

礁子「まあ、そんなところ」

砂子「いつまで続けるのよ？そんな未来のないこと」

礁子「いいの。やっていればいつか道が拓けるんだから」

礁子、退場。

## 第6場 砂子の部屋

砂子「礁子のいつかはいつ来るのだろうか？あの子はまだ想像もしていない。10年先の自分の姿を」

砂子、鏡を見る。鏡の向こうに20代前半の砂子Aが現れる。さらに、砂子の背後に20代後半の砂子Bも現れる。

砂子「鏡を見ても1年前と今日の違いはわからない」

砂子B「私はいつものように下地を塗る。私はいつものようにファンデーションを塗る。いつものようにアイシャドウをつける。いつものように頬紅をつけ、いつものように眉毛を描き、いつものように口紅をつけ、いつものようにいつものようにいつものようにいつものように」

砂子と砂子Aは向かい合って化粧をするが、砂子Aは、砂子から少しずつ離れていく。

砂子「でも何も変わらないようで何かは変わっている。1年ずつ比べても差はないのに10年前の私と今の自分では孔雀と駝鳥ぐらい違って」

権藤宣子の声「私共マザードリームが提供したいのは新しい選択肢です」

## 第7場 マザードリームの説明会

権藤宣子、登場。砂子A、Bは退場。

権藤宣子「30年前に比べ、35歳から44歳の間に妊娠する女性は、なんと2倍近くに増えました。高いレベルの教育を受けた女性が、その能力に応じた社会的地位を得るには、出産を後回しにしなければならぬからです。しかし女性の身体には時間の制限があります。自然の摂理で生殖能力は30代で少しずつ低下していくのです。そこで私共はそういった女性たちのために、画期的な方法を編み出しました」

権藤宣子の言葉に合わせて、砂子とアンサンブルが、毎日の生活を、儀式のようなムーブメントで表現していく。

権藤宣子「日々の生活は少しだけしか変わりません。朝起きて、コーヒーを入れ、顔を洗い、朝食を取り、歯を磨き、腹部にホルモンを注射する。朝起きて、コーヒーを入れ、顔を洗い、朝食を取り、歯を磨き、腹部にホルモンを注射する。これを14日間繰り返すだけです。皆さんの卵巣から採取した卵子は、皆さんが子供を本当に作る時まで冷凍保存して大切に保管いたします。何かご質問はございますか？」

砂子をはじめ、何人かがハイッと手を挙げる。

権藤宣子「では、その方、どうぞ」

砂子「卵子はいくつの時に冷凍保存するのがいいのでしょうか？」

権藤宣子「卵巣における卵子の生産能力は年齢と密接な相関関係にあります。27歳をピークすると40歳でその95%が失われます。つまり年齢が若ければ若いほどベストです。今すぐあなたの卵を保存しましょつ」

権藤宣子、卵を取り出して砂子に手渡し、退場。

砂子「百万円で冷凍保存した卵子を本当に使うつもりはなかった。私はまだ自然妊娠をあきらめてはいない。

でも王子様は今すぐ現れるわけじゃない。一年後？二年後？三年後？眠り姫が眠りながら待つには魔法の魔法が必要なのだ」

箸で、生玉子をかきまぜる音。砂子の家族たちが出てくる。父親、母親、礁子が趣味の良いダイニングテーブルですきやきを食べている。